



「逆ソクラテス」を読んで

先日、あるお家の方が一冊の小説を渡してくださいました。

「逆ソクラテス」という伊坂幸太郎氏の短編集です。

テーマになっているのは、「先入観」。

全てのお話の主人公は小学生、舞台も全て小学校でした。

さて、「先入観」という言葉を聞いて、読者の方はどんなことを思い浮かべるでしょうか。

私は、この言葉一つだけで何時間も語る事が出来そうです（笑）。

それくらい、教育の場においてこの先入観の持つ力は甚大です。

先入観は、別の言葉で言えば「思い込み」です。

例えば、前号で紹介したプラセボ効果。

「これで治る」「もう大丈夫だ」、そう思い込むだけで、病気の症状や怪我の痛みが緩和されたり改善されたりします。

特別な治療や薬を与えているわけではないにもかかわらず、です。

これは、何度考えてみても衝撃の事実です。

にわかには信じられません。

思い込むだけでそんな奇跡のようなことが起きるのならば、その力を自在に使えるようになったらとんでもないことができそうです。

実際に、プラセボ効果以外にも「思い込み」の力が発揮されるとされている話はいくつもあります。

例えば、ピグマリオン効果というものがあります。

1964年、サンフランシスコの小学校で、「ハーバード式突発性学習能力予測テスト」と名付けた知能テストが行われました。

この知能テストは一般的な知能テストでしたが、「将来、児童の成績が伸びるかどうかがわかるテスト」と教師にはあらかじめ伝えておきました。

その後、テスト結果とは関係なくランダムに選定した「成長が期待できる児童」と「期待できない児童」に分けたテスト結果を教師に提示しました。

ランダムなので、全くの適当な選定です。

しかし、それを知らされた教師はランダムであることを知りません。

テストの結果を聞かされ、「なるほど、この子とあの子とその子は成績が伸びることが期待できるんだな」という認識を持ったということです。

その8か月後。

再度知能テストを実施したところ、ランダムに抽出したはずの「成長が期待できる児童」の成績が10%以上も向上したという結果が出たのです。

さらに、学習への興味や自主性といった態度面でも向上が確認されたそうです。

教師が特定の児童に成長を期待して接したこと、児童も自分が期待されていることを意識したことによりこのような結果になったとされています。

ちなみに、「ピグマリオン」とはギリシャ神話に出てくるキプロスの王の名前です。このような話が残っています。

現実の女性に失望していたピグマリオンは、あるとき自ら理想の女性・ガラテアを彫刻しました。

その像を見ているうちにガラテアが服を着ていないことを恥ずかしいと思い始め、服を彫り入れます。

そのうち彼は自らの彫刻に恋をするようになり、さらに彼は食事を用意したり話しかけたりするようになり、それが人間になることを願いました。

ついにはその彫像から離れないようになり次第に衰弱していく姿を見かねた女神アプロディーテがその願いを容れて彫像に生命を与え、ピグマリオンはそれを妻として迎えました。

願い続けたこと、思い続けたことが叶うという意味合いから、先の教師が期待する効果のことをピグマリオン効果と名付けているのです。

もちろん再現性（同じような実験をして同じ効果を確認できること）の観点や、人で実験する事の倫理的な問題（子どもを長期間にわたって実験的に観察すること）から、この実験自体を支持しない学者もいますが、いずれにせよ子どもたちの成績が明らかに変化した事実は確認されています。

一体、なぜこのようなことが起きるのでしょうか。

少し詳しく書くと、期待を持ったことによって、教師の「対応の仕方」が変わったことが確認されています。

たとえば質問されて生徒が答える場面で、期待されている生徒が正解した時には大きくほめ、答えに戸惑っていても待つ時間が長く、間違っていた場合でも正しい答えが言えるようにヒントを与えてもう一度チャンスを与えるなど、生徒にもその期待が伝わるかのような言動があったとの事です。

つまり、よりその実験を詳しく分析するなら、そのような教師のかかわり方に生徒を伸ばす効果があったと考えた方がよさそうです。

尚、ピグマリオン効果と反対の効果としては「ゴーレム効果」というものがあります。

ピグマリオン効果が、相手に対して期待をすると、その期待通りになるという心理効果なのに対し、「ゴーレム効果」は相手に対して期待できない、見込みがないと思っていると、本当にその通りの悪い結果になってしまうという効果のことです。

ちなみに、ゴーレム効果のゴーレムとは、ユダヤ人に伝わる泥人形のことです。

ゴーレムには意思がなく、呪文を唱えると動き出しますが、額の護符の文字を1文字取り去ると、土に戻ってしまいます。

このように、ネガティブな影響を受けると動けなくなってしまう様子からゴーレムという名がつけられました。

先の実験で言うなら、ランダムに抽出された「成長が期待できない児童」にはそれなりの負の影響があったことが予測されます。

冒頭に示した、「逆ソクラテス」という小説は、まさにこの点のマイナスを指摘した作品だったのです。

担任として登場する久留米先生は、どこか独特の威厳があり、何かにつけ「自分が正しい」と思っています。

子どもたちに対しても「この子はできる、あの子はできない」と決めつけているところがある先生でした。

そのなんでも自分は知っている風を揶揄して「逆ソクラテス」というタイトルなのでしょう。

その作品の中では、久留米先生に「できない」と決めつけられている草壁くんという男の子が登場します。

担任の先生から「出来ない子」と決めつけられている草壁くんは、実際にいろんなことが苦手なわけですが、それに拍車をかけているのは久留米先生の「決めつけ」にあると草壁くんの仲間たちが指摘していくのです。

途中で、草壁くんが意を決して「僕は、そうは、思いません」と久留米先生に反論するシーンがあります。

あなたがなんと言おうと、周りがなんと言おうと、僕は僕自身の可能性を信じている。

だから、「僕は、そうは、思いません」と言ったのです。

人生においては、周りの人たちのネガティブな声や心無い評価が、自分のやる気や推進力を一気に奪い取っていくことがあります。

「どうせ無理だよ」

「そんなのできるわけない」

「やってみるだけ無駄だって」

そんなドリームキラーの心無い一言やネガティブな評価が、多くの人々の夢や目標を今も尚奪い続けています。

そして、その言葉を真に受けて「自分はできない」と思い込んでしまったとしたなら。

人生においてどれほど悲しくて恐ろしいことが起きるかは、ここまで読んで下さった方なら分かるのではないかと思います。

だからこそ、先の作品にもあったようにここぞという場面で「僕は、そうは思わない」と勇気をもって言えるかどうかが大切なのだと思います。

そして、

「大丈夫」

「きっとできるよ」

「あきらめないでやっごらん」

と言いつけてくれる人たちが学校という場にいることが、どれほど大切であるかということも改めて認識しました。

素敵な一冊を紹介していただき、ありがとうございました。

☆ ↓ 読者ページはこちらから ↓ ☆ ご意見ご感想など気軽にお寄せください

<https://docs.google.com/forms/d/1qqf4cPLcipcWaimWdu-6IFM73JahODYK4ROldg7jLxM/edit>

